

着物を取つて残りで前垂の一本も取れる」

「それやつたら、何時も嫌アが反物一反買ふて来ると、着物と羽織と對で取つて残りで風呂敷が取れます」

「それ見い、それだけでも徳やないか」

「そんなら、小さうて、えらい人がおますか」

「そらある。お前太閤さん知つてるか」

「へエ、至つて心易い」

「コレ、うそ吐きな。太閤さんは昔の人に似合はぬ小さい、五尺無かつたさうなが彼の人が世の中へ出てから、三百年の動亂を治めたと云ふ。彼の人の家來に加藤清正と云ふ人は七尺からあつたが、五尺にたらぬ太閤さんの家來や、江戸の浅草の観音さんは御身丈け一寸八分やけれども、十八間四面の堂の主ぢやないか、仁王さんは大きいでも門番して居る、門番だけで喰へぬよつてに、草鞋を造つて賣つてるが、我が足に合はしたよつてに、大きい誰も買はへん。山椒は小粒でもヒリ、と辛いと云ふ事がある。小さうても卑下するに至らん、大きう成つて歩き」

「大きに、能う云ふとくはなはつた。そんなら、相撲取りでも小さいのが、おますか」

「ハ、あるとも〜」

「小さい相撲取は、年百年中負けて泣いて居ますやらうな」

「そら何を云ふのや、小さい相撲取が負けて、大きい相撲取が勝つときまつたら、誰も相撲を見に往く者は無い。小さい相撲取が大きい相撲取をゴロ〜仆すので、皆が楽しんで見に往くのや」

「そんなら、昔から小さい相撲取が、大きい相撲取を仆した話がおますか」

「夫れはある。俺しは委しい事は知らぬが、祖父から聞いたが、昔將軍家に御目出度い事があつて御前相撲を催す事になつた。何か變つた取組がなからうか、大きな者と極く小さな者と取組ましたら面白からうと、其の當時信州小諸から出た雷電爲右衛門と云ふ、是れは大きかつた八尺五寸からあつたと云ふ、此の相手に小さいのはと云ふと、大阪福島に鉄湯三吉と云ふ相撲取、丈が四尺に足らぬ横巾が四尺からあつた、四斗樽見た様な相撲取、此の鉄湯と雷電と取組ましたら面白からうと云ふので、早速江戸から赤紙附の書面が鉄湯の宅へ着いた、鉄湯が書面を開いて見ると、急々江戸へ下つて来い早速江戸へ乗り込んだ。頭取が鉄湯關大きに御苦勞さん、此度は御前相撲で雷電關と取組んでもらひたい、いや結構で雷電關と取りますれば、私は負けても勝て御座りますと、番組に承知の點を付けた雷電の處へ往て、上方から来た鉄湯關と取組んでもらひたい、オ、鉄湯は甚い小さい相撲やさうな、先が承知なら俺は誰でも相手は構はん、先は承知處やない負けても勝ちちやと喜んで居ます。ナニ俺と取組のを辭退もせず、負けても勝やと云ふて居るか。小積な奴めがと、わすかの事が氣に障つた、